

ありふれたもうひとつ
の物語

平無門

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ふと気が付くとそこは「オルクス大迷宮」六十五階層——異世界召喚された生徒たちが訓練のため迷宮に潜り、そしてトラップを発動させてしまった直後。“初めて”“ベヒモスと遭遇した場面だった。

何故だか身に覚えのある状況に戸惑いと混乱を露にしなながらも状況を理解した浩介。そんな彼がとつた行動によって紡がれる物語とは…

みたいな感じのifストーリー。

遠藤浩介が奈落に落ちる話です。

ぶつちやけ逆行要素はちよびつとしか出ないと思うのであんまり気にしないでね。

書いてるうちに多分作者も忘れるから

原作の本編及びアフター既読推奨。ネタバレもあるだろうし完全に未読な方には不親切な書き方になってしまうと思うので…。ちなみに作者はweb版小説派、この話もweb版を読み返しながら書いていくつもり。ただ一応サイトで漫画と、放送されたアニメは履修してます。なので、基本的にはweb小説準拠で書きつつ、アニメや漫画の要素もちよいちよい入ってくる感じです。もちろんオリジナル要素も有ります。

なにぶん不慣れなので、拙くても生暖か〜い目で見ていただけたらなあと思います。好きなキャラである彼がもし本編にもっと関わってたらという思い付きによる産物。完全に作者の趣味と嗜好が詰め込まれた作品です。腐向け要素も追々入れたい。だつて魔王本人含む他共に認める魔王の右腕で部下で親友で、地味に人類最強格なキャラとか最高では？好きになるしかないよね

目次

第一章

プロローグ	1
煩悶	6
崩落	16
奈落での目覚め	23
搜索と再会	35

第一章

プロローグ

夢を見ているのかと思った。

水の中にもいるような、遠くから誰かが話しているような感覚。不鮮明で聞き取りにくい周囲の音。

目の前は霧がかかったようにぼやけていて、はつきりと認識することが出来ない。まるでまどろみの中にいるようなふわふわとした心地だった。

かろうじて自分が立っている、ということは理解できる。でもそれ以上のことはぼんやりして頭が働かずわからない。

(なんだろ…周りがすこし、騒がしいような…?)

そうしてぼうつとすること数秒、ふと感じ取った違和感に首を傾げた直後のことだった。

突如はつきりした音が、どこか懐かしさを感じさせる緊張と焦りを帯びた声が聞こえ

た。

「——お前達、直ぐに立ち上がって、あの階段の場所まで行け。急げ！」

電のごとく轟いたその号令に、ビクツと身体が反応し一気に意識が覚醒する。

そうして、霞が晴れてクリアになった視界に最初に映り込んできたのは、百を超える骨格だけの体に剣を携えた魔物“トラウムソルジャー”の大群だった。

「……は？」

ごしごしと目を擦ってもう一度確認してみる。

残念ながら見間違いじゃなかった。

なんならさつきより骸骨戦士の数が明らかに増えている。うん、無限増殖するんだよね知ってる。

周囲をざっと見渡せば、自分がいるのが巨大な石造りの橋上の中間あたりであり、近くにはクラスメイトやハイリヒ王国騎士の姿があるのが分かる。

次に、骸骨戦士がいる側の橋の袂とは逆サイドの方向に視線を向ける。

巨大な魔物の姿がいやでも目に入った。

鋭い爪と牙を打ち鳴らしながら、頭部の兜から生えた角から炎を放っている巨大な魔物。

かつて自分を含めた多くのクラスメイトにトラウマを植え付けてくれた、ある意味懐かしい存在、*「ベヒモス」*が堂々たる姿で立ち塞がっていた。

……うん。オーケー落ち着け俺。いったん落ち着こう。こういう時こそ慌てず冷静に——

「——って、なれるかあ!!どうなってんだよこれ!？」

そう思わず突っ込みの叫びをあげた少年の名は、遠藤浩介。

自動ドアが三回に一回しか反応せず、皆勤賞なのに教師が気付かないせいで欠席扱いされたあげく出席日数が足りないと呼び出されるほど存在感皆無な、影の薄さなら世界一!と言われるほどの影薄であること以外はごくごく普通の少年である。

たとえ家族にすらちよくちよく存在を忘れられようとつ!魔物にすら気付いてもらえなからうとつ!さっきの叫びも普通にスルーされてようと!たぶん、きつと、おそら

く、普通の人間……のはずなのだ！

「ごっつ……!? な、なんか急にグサつときたような……いや、今はそんなこと気にしてる場合じゃないよな」

わずかに痛む頭を振り、思考を切り替える。

そんなことよりも、だ。何故「彼ら」の姿がここにある？

だって、あり得ないだろう。たしかに死んだ筈なのに。

どうして生きてるんだ。

中村恵里らトータスで死亡したクラスメイト。

自分のせいで死んだ騎士団員たち。

そして、先程の号令を発したメルド団長。

「ハハ……これじゃまるで、過去に戻ったみたいじゃねえか」
いや、「みたい」ではない。

戻ったのだ。あの日、あの場所に。

この状況は、かつて経験した過去の出来事そのもの。

死んだ筈の顔触れに、幼い印象を受けるクラスメイトの姿。

場所も、状況も、全てが全てが記憶にある通り、そっくり同じ。まさに過去の // 再現 //。

ありえない、あり得るはずがない。

でも、そうとしか考えられない。

たしかに自分は過去に戻ったのだと、嫌な確信をなぜか持つてしまった浩介はヒクリと頬を引き攣らせ、乾いた笑いを零す。

…ああ、いつそ夢ならいいのに。

悪趣味にも程があるけど、夢ならばいくぶんましな気分になれるだろうに。

「……………まじかあ……」

夢じゃないとうすうす理解していながらも、ありえない現実に浩介は「頼むから夢なら今すぐ覚めてくれ」と願わずにはいられなかった。

煩悶

「……………とりあえず、魔物倒しとくか…」

スンツと死んだ目になる浩介。

なんでこんなことになったんだ、とか。原因は、とか。色々気になることや考えなきやいけないことが多すぎる。

もうわけがわからないよ！状態となった浩介はいったん思考をリセットするために、あれやそれやを頭の隅に追いやって、うじやうじや湧き出るトラウムソルジャーを相手にすることにした。

ひとはそれを現実逃避と呼ぶ。

手始めにまず一体、すぐそばにいた骸骨の首を刎ねた。隣の骸骨が「え、何が起こったの？」みたいな雰囲気でもキョロキョロするのに無性にイラツとしたので容赦なく蹴りを叩き込む。そいつは他の数体を巻き込んであっけなく橋の外に落ちていった。

目の前にいる自分をスルーして他のクラスメイトを狙うことにちよつぱり傷つきつ

つ「はいはいドーせ俺は影薄ですよ」と八つ当たり気味に次々骸骨を倒していく。

パニック状態でまともに戦えず危うい生徒や、生徒達を必死にカバーしてくれてる騎士団員達のフォローもそれとなくしてるけど、やっぱり誰にも全く気付かれてない。

敵にも味方にも等しく作用する存在感のなさは流石の一言である。

：いいんですけどね、その方が今は考え事に集中できるし？殆どのクラスメイトがまともに戦えてないなか普通に魔物の相手してても不自然に思われなくて済むし。

べ、別に強がってなんかないしつ。

心の中で誰に対してなのか分からない言い訳しつつ、しよっぱい気持ちで無限増殖する骸骨を間引いていく。

そうして一体、また一体…と無心で倒していくうちに少し頭が冷えた浩介は、魔物を狩る手は止めずに思考を巡らせ始める。

(夢オチとか幻術かけられた、とか。あと南雲の作ったリアルすぎるゲームって可能性も一応考えられなくもないけど……まあ違うだろうな、絶対)

こんなゲームをハジメが作る理由もなければ、わざわざ自分にやらせる意味もない。

記憶にもテストプレイを頼まれたり自分から何か怪しいゲームをやろうとした覚えはないし、もし不具合で記憶に障害が出るなら職人氣質のヤツが放っておくはずもない。

なにより、これがゲームなのだとしたら、〃自分は今ゲームをしている〃という自覚や感覚があるはずだ。それが無いのだから、どう考えてもこの線はない。

だからといって、夢や幻術にしては何もかもが現実リアルすぎる。

緊張感や殺気が入り混じったヒリヒリとした空気。肌を伝う汗に、少しずつ上がっていく体温と呼吸。魔物を倒すときの手応え。そして、骸骨の剣が掠った部分に感じる痛み。

感じる全てが、〃ここ〃が現実であると突きつけてくるようだ。

肉体スペックや技能が、〃この時〃のものに戻っているのも確認済み。そのせいで身体が重く感じられ、頭感覚と実際の動きに違和感があるために先程の骸骨の剣も完全に避けきれなかった。

使徒よりずっと弱い筈の魔物すら一掃できず、傷を負うなんて情けない。

昔の俺はこんなに弱かったんだなど、ある種の感慨すら感じる。時間的にはいうほど昔でもないけど、濃密すぎる日々のせいで気分的にはもう遠い昔同然。

自他共に認める魔王の右腕とはいえど、元は普通の人の子。初めから強かったわけはないのだ。

…あつ、今ちよつと深淵卿が顔出した気がする、やめろ出てくるな。

「呼んだ？」と這い出てこようとするとする心の中の卿を全力で叩き返す。「フツ…深淵は何度でも甦る」とか言ってる気がするけど気のせい、あくあく聞こえない。てかこの時点ではまだ習得してない技能なんだからいるわけないよな、うんただの幻聴幻聴。

ともかくにも。

現実味が薄いけれど、認めたくないけど、色々な可能性と現在の状況などを吟味すれば辿り着く結論はひとつしかないわけで。

必死に目を逸らし続けていたその結論を、浩介はようやく受け入れた。というかもう受け入れるしかない。

どういうわけか精神だけが過去にタイムスリップしてしまったらしい、ということ
を。

いわゆるタイムリープ。逆行ともいう。

「あゝゝゝありえねえ…：ほんと、今までも色々な目に遭ってきたしそれなりに非現実的なことにも耐性出来てたつもりだったけどさあ。まっさかこんなことまで怒るとか流石に予想できねえでしょ。

…しかもさあ…：よりにもよって、なんつでこのタイミングなんだよ…：俺にどうしろつ

てんだ：」

頭を抱えチラリと視線を向けた先、そこにはベヒモスをたつたひとりで足止めする
無能な南雲ハジメの姿があつた。

~~~~~

ほんの少しだけ時を遡ってみる。

ちようど、浩介が片手間に魔物を相手しながら思考に耽つてる最中のこと。

当然のことながら、時間が止まるわけもなく戦況は刻々と変化していた。……浩介の  
記憶にある流れと全く同じように。

雫やメルド団長の静止も聞かず、実力を過信してベヒモスに挑んだ光輝達は返り討ち  
にあい満身創痍。

ハジメが自分一人でベヒモスの足止めをすることを提案し、メルドはそれが最善である  
と判断、彼を信じてそれを了承した。そして光輝らを連れ撤退。ハジメの思いを無駄  
にしまいと香織がそれを魔法で回復。

復活した光輝はそのカリスマで心の折れかけていた生徒達を奮い立たせ、頼れる団長  
の存在もあり、みんなは崩れかけた体勢を立て一気に反撃に打って出た。

凄まじい速度の殲滅は魔物の増殖スピードを上回り、上層に繋がる階段への道が開ける。

「皆！続け！階段前を確保するぞ！」

掛け声と同時に走り出した光輝に、ある程度回復した龍太郎と雫が続き、バターを切り取るようにトラウムソルジャーの包囲網を切り裂いていく。

そうして、遂に全員が包囲網を突破した。もちろん浩介も、考え事をしてようが流石に戦況くらいは把握してたのでちゃんと後に続いて包囲網を抜けていた。

背後では、再び橋との通路が肉壁ならぬ骨壁により閉じようとしたけれど、そうはさせじと光輝が魔法を放ち蹴散らす。

クラスメイトが訝しそうな表情を浮かべた。それもそうだろう。目の前に階段があるのだ。さっさと安全地帯に行きたいと思うのは当然である。

「皆、待って！南雲くんを助けなきゃ！南雲くんがたった一人であの怪物を抑えてるの！」

香織のその言葉に何を言っているんだという顔をするクラスメイト達。そう思うのも仕方ない。なにせこのときのハジメは「無能」で通っていたのだから。だが困惑するクラスメイト達が数の減ったトラウムソルジャー越しに橋の方を見れば、そこには確かにハジメの姿があった。

…と、ここらで漸く思考の海から帰ってきた浩介は、再び頭を悩ませることとなる。だって浩介は知っている。この先の展開を。これから彼がどんな目にあうのかを。

(檜山を止めるべきか…？いやでも、もしここでアイツが奈落に落ちるのを阻止したら

——)

——南雲ハジメが運命に出逢うことはなく、奈落の化け物は生まれない。

彼は「最強」にならない、なれない。

ハジメが「最強」にならないということは、神殺しの魔王が存在しなくなるということと同義。そうなれば、神を殺す兵器も、この世界の人々が救われる手段も、地球への帰還方法も作られることはない。

記憶の中にある「魔王」たる彼が生み出したもの、為し得た偉業所業、その全てが「なかつたこと」になるのだ。

そうなればもう、自分達の末路なんて決まりきってる。故郷の地球に帰れずに、悪趣味な神の玩具として弄ばれこの異世界の地で死ぬしかない。

この世界にも、自分たちにも、未来はない。

(——だから、「これから」のことを考えるなら、俺は檜山を、檜山のやることを見逃すべきなんだ)

鍊成でベヒモスを拘束し続けるハジメの背中を見る。元々インドアだったから仕方ないとはいえ、細く頼りないそれは魔王の彼に比べればひどく頼りない印象をうける。でも、あの背中にクラスメイト全員が救われた。

あと少しすればハジメの魔力は切れるだろう。離脱しようとした彼は、助けたクラスメイトの裏切りにより、戻るとは叶わず奈落に落ちる。

「っ……」

胸中に溢れ出る形容し難い感情に、堪えるようにギリツと歯を軋ませる。

大丈夫、見捨てるわけじゃない。奈落に落ちるのは彼の為でもあるはずだ。奈落の日々があつたからこそ彼は最愛の存在とあの強さを手に入れられたのだから。

何もせず、成り行きを見届ける。来るべき未来のためには、それが確実に、最善の筈

——本当に？

自分自身へ言い聞かせるように、心の中で並びたてた言葉に、抑えきれない懷疑の念が浮かぶ。

“今回”が、記憶にある“前回”と同じ道筋を辿る保証は、確証はどこにある。既に“未来の記憶を有する自分”という異物が、“前回”とことなる事象が存在しているといふのに。

——もし、南雲が生還できなかったら

奈落に落ちても死ななかつた。それは記憶の中の世界の話であつて、目の前で奮闘している頼りなくも優しい「彼」が確実に生きてられるとは限らない。

それなのに何もしないというのは、見捨てるのと何が違うというのか。

(でも、じゃあどうすればいいんだ)

だつて成り行きを見守る以外に何ができる？この場で彼を助けて、その後は？未来がないと知りながら死ぬまで素知らぬ顔で、のうのうと過ごすのか？助けるなんてのは浩介のただの自己満足にしかないんじゃないか？

不安、疑問、迷い、焦燥、混乱。

浩介の頭の中はさまざまな感情でもうぐちゃぐちゃだつた。もう思考も何もかも捨ててしまいたいくらいに。でもそんなことをしてはいけないと、自棄になりそうな自分を理性で繋ぎとめ必死で頭を回転させる。

はやく決めなければ。悠長に考えこめるだけの時間はもうない。「その時」まであと幾許の猶予も残されていけないのだから。

(くそつ、くそお……なんで俺なんだよ。なんで、よりによつてこのタイミングだつたんだ)

たればを語つてもしようがないとは知りつつも考えずにはいられない。

もし“戻る”のがもつと早かったなら、覚悟を決めるられるだけの十分な時間がとれた。もしかしたら他に打てる手だつて見つけられたかもしれない。

逆に“戻る”のがもつと遅かったなら、こんなに苦悩する必要はなかった。ただ流れに身を任せ、力を蓄えることに専念できただろうに。

分からない。何が正解で、どうすべきなのか。

いまだ決断を下せぬ浩介の視界に、こちらに向かつて猛然と駆け出すハジメの姿がいやにハッキリと映っていた。

## 崩落

クラスメイト達が無事に階段前まで撤退し、隊列を組んで詠唱の準備に入った頃。それをチラリと後ろを見て確認したハジメはタイミングを見計らっていた。

たった一人でベヒモスを抑え続けていたハジメの魔力はじきに尽きる。回復薬は既にないから、足止めできるのはあと少しだけだ。

ベヒモスは相変わらずもがいているが、この分なら錬成を止めても数秒は時間を稼げるだろう。その間に少しでも距離を取らなければならない。：そう考えるハジメの額には汗が浮かび、心臓は極度の緊張でバクバクと音を立てているのがわかるほどだった。

そして、数十度目の亀裂が走ると同時に最後の錬成でベヒモスを拘束。すぐさま踵を返して一気に駆け出す。

ハジメが猛然と逃げ出した5秒後、地面が破裂するかのようには粉碎されベヒモスが咆哮と共に起き上がる。その眼に憤怒の色が宿つといると感じるのはハジメの勘違いではないだろう。なにせ、長時間半身を地面に埋められ拘束され続けたのだから。

鋭い眼光が、己に無様を晒させた怨敵を探すようにギラつき、ハジメを捉えた。

再度怒りの咆哮を上げたベヒモスはハジメの背を追おうと四肢に力を溜める。だが次の瞬間、あらゆる属性の攻撃魔法がその巨軀に殺到した。

夜空を流れる流星の如く、色とりどりの魔法がベヒモスを打ち据える。ダメージはさほど無いようだが、しつかりと足止めにはなっていた。

いける！と確信したハジメは、転ばないように注意しながら頭を下げ全力で走った。すぐ頭上を致死性の魔法が次々と通っていく感覚には、正直生きた心地がしないが、チート集団がミスするはずはないと信じて駆ける。ベヒモスとの距離は既に三十メートルは広がっていた。

それに思わず頬が緩んだ直後。一転、表情が凍りついた。

無数に飛び交う魔法の中で、一つの火球がクイツと、自分に向けて軌道を僅かに曲げたのを見たからだ。

それは明らかにハジメを狙い誘導されたもの。

(なんで!?)

疑問や困惑、驚愕が一瞬でハジメの脳内を駆け巡り、愕然とする。

咄嗟に踏ん張り、止まろうと地を滑るハジメの眼前にその火球は突き刺さった。着弾の衝撃波をモロに浴びたその身体は呆気なく来た道を引き返すように吹き飛ばす。

なんとか直撃は避け、内臓などへのダメージもないが三半規管をやられ平衡感覚が

狂ってしまったハジメは、それでも前に進もうとふらふらするのを堪えて立ち上がった。

だがしかし、ベヒモスもいつまでも一方的にやられっぱなしではなかった。ハジメの背後で咆哮が鳴り響く。思わず振り返れば、三度目の赤熱化をしたベヒモスの眼光がしつかりとハジメを捉えていた。

そして、赤熱化した頭部を盾のようにかざしながらハジメに向かって突進する。

ふらつく頭、迫り来るベヒモス、遠くで焦りの表情を浮かべ悲鳴と怒号を上げるクラスメイト達。霞む視界、一瞬よぎった黒い影。

「——南雲お!!」

名前を、呼ばれた。

直後、タツクルするような勢いで飛びかかってきた「誰か」に押し倒されるような形でハジメはその場から離れ、ごろごろと地を転がる。それとほぼ同時に、ベヒモスによる怒りの全てを集束したような激烈な衝撃が橋全体を襲った。

橋全体が震動し、着弾点を中心に物凄い勢いで亀裂が走る。

「ぐっ……南雲、立てるか?！」

「う……あ、れ。遠藤、くん？なんで」

「話はあとーはやく立て、崩れるぞ!!」

そんな状況じゃないと知りつつも、ハジメは何故と問わずにはいられなかった。急かされなんとか立ち上がったのはいいものの頭の中は疑問でいっぱいだった。なにせ相手はマトモに会話……と喋っているのか分からないけれど、兎に角ちゃんと関わるのはこれが初めてといっても過言ではないレベルの人だったのだから。

遠藤浩介。名前とクラスメイトであること、あと何故かやたらと影が薄い少年であるということ位しか知らない。間違っても仲がいいとは言えない存在だ。……まあそもその話、ハジメはクラスでも浮いた存在であり、積極的に他者と関わりを持つともしてなかったの親しい存在自体がそう学校にいないのだけだ。

兎にも角にも、浩介とハジメはたいした接点を持たず、友達とすら呼べない関係であるということは確かなわけで。

(なのに、なんで)

ベヒモスの攻撃から庇うような真似をしたのか。クラスメイトたちのいる場所、せつかく確保した安全地帯からわざわざ出てきたのか、今こうして、手を引いてくれるのか。

そうやって、疑問に気を取られていたのが悪かったのだろう。ただでさえふらふらと

危なっかしい足取りだったハジメは、足元に走った亀裂に躓き転んでしまった。ハジメの腕を掴んでいた浩介も、それにつられる形で体勢を崩してしまふ。

メキメキと悲鳴を上げていた橋が、ついに崩壊を始めていた。度重なる強大な攻撃にさらされ続けた石造りの橋は、遂に耐久限度を超えたのだ。

「グウアアアア!?!」

ベヒモスが悲鳴を上げながら崩壊し傾く石畳を爪で必死に引つ搔く。しかし、引つ掛けた場所すら崩壊し、抵抗も虚しく奈落へと消えていき、断末魔だけが木霊する。

転んでしまったハジメのいた場所も、起き上がるより先に崩壊し身体が瓦礫とともに宙に投げ出される。でも、ベヒモスのように落ちることはなかった。浩介がしっかりとその左腕を掴んでいたからだ。

「くっそ、今引き上げる、しっかりと掴んでろ!」

「遠藤くん…ダメだよ、このままじゃ君まで、僕はいいから離して!」

嘘だ。本当は離して欲しくなんか無い、助けて欲しい。でも、こうしてる今も橋に亀裂は広がっている。浩介のいる場所もビシビシと嫌な音が絶えず鳴っていて、今にも崩れそうな、かろうじてもつてるような状態だ。このままでは確実に、ハジメの巻き添えで浩介も一緒に、二人ともが落ちてしまふ。でも手を離せば、浩介だけならまだなんとか離脱出来るはずなのだ。

「っー馬鹿なこと言って……いやお前はそういうヤツだよな。でもお断りだ！助けてくれた恩人を、仲間のひとりも助けれずに何がチートだ！」

そう言つて浩介はより強くハジメの腕を握り、一気に引き引き上げるため腕に力を込める。

身体が持ち上がる感覚とその言葉に、助かるかもという希望をハジメが抱いた瞬間。

ぼたり、と頬に水滴が落ちてきた。

「…………え」

驚愕の声を漏らしたのはハジメか浩介か、それとも対岸のクラスメイトや騎士達だったかもしれない。

浩介の腹から生える幅の狭い黒の刀身、無限に増殖する骸骨騎士が持つてた武器だ。刃先を伝つてぼたぼたと血が滴り落ちる。剣の柄を握るのはトドメを刺しそびれていたのだろう、上半身だけのトラウムソルジャー。驚愕に目を見開き、視線を後ろにやつた浩介の口に浮かぶ自嘲の笑み。カタカタと嘲笑うように、彼の背後で骸骨が歯を鳴らした。

「……」

まるでスローモーションのように緩やかになった時間の中、呆然とするハジメの目にその光景がはつきりと焼き付いていた。

「——遠藤くんっ!!」

骸骨をなんとか殴り飛ばした浩介の腹からズルリと剣が抜け、ゲホツと血混じりの咳を零す。同時に、彼の足場も完全に崩壊した。

今度こそ、宙にその身を投げ出されもはやなす術もなく。浮遊感に「あ、僕死ぬんだ」と諦めと恐怖と絶望からハジメはぎゅつと目を瞑る。だが、それでも、と言うように掴まれたままの腕が引つ張られ二人の位置が入れ替わり、ハジメは浩介を下敷きにするような体勢になった。

「わ、りい南雲…偉そうなこと言っというこのザマだ。せめて、体縮めて、衝撃を」

「何言っつて、もう僕らは…」

「大丈夫、お前は死なないよ。絶対に」

ビュウビュウとなる風の音は落下の速度を物語る。底も見えない高さから落ちてるのだ、どう考えても助かるわけない。根拠のない気休めの言葉だ。…けれど、断言の形で発された言葉に、ハジメの心に満ちる絶望がほんの少しだけ薄まった。

そうして、少年二人は奈落へと落ちていった。

## 奈落での目覚め

ザアーと水の流れる音がする。

冷たい微風が頬を撫で、冷え切った体が身震いする。頬に当たる硬い感触と下半身の刺すような冷たい感触、そして腹部の痛みに「うっ」と呻き声を上げ浩介はひとり目を覚ました。

ボーとする頭と、腹の傷ほどでは無いがズキズキと痛む全身に眉根を寄せながら両腕に力を入れて上体を起こす。が、とたんに酷い目眩に襲われて視界が歪み、再び地に伏す羽目になった。

「うぐっ、痛え……ここは……俺は確か……」

起き上がるのは諦め、寝転がったまま首から上だけを動かし辺りを見回す。

周りは薄暗いが緑光石の発光のおかげで何も見えないほどではない。視線の先には幅五メートル程の川があり、下半身が浸かっていた。上半身がうまいこと迫り出した川辺に引つかかかって乗り上げたようだ。

冷たい地下水に浸かったままとするのは不味いだろうと、ずりずり這うようにして川から出た浩介は、痛む傷を片手で抑えながらふらつく頭を叱咤し記憶を辿る。

「ああそうだ……橋が壊れて、俺も落ちたんだったな。……それで……」  
靄がかかったようだった頭が回転を始め、脳裏に落ちるまでの出来事が蘇り出す。

あの時。ベヒモスに背を向け走り出したハジメを援護するため、クラスメイト達が攻撃魔法を次々放った時。

浩介はその段階になってもまだ決断を下すことができていなかった。ハジメが奈落に落ちるのを見届けるべきか、それとも阻止すべきなのか、悩んで悩んで……悩んでる間に、時間切れを迎えてしまった。

流星のごとく飛び交う魔法の一つが不自然な軌道を描き、ハジメの方へ向かう。ついその動きを目で追っていた浩介は自然な流れでそれを目撃した。

……自分に迫る火球を認識した瞬間の、ハジメの凍り付いた表情を。

疑問、驚愕、困惑といった様々な感情が入り混じったその顔を見た瞬間、ガツンと頭を殴られたような衝撃を受けた。そして直感的に「違う」と、そう理解したと同時に、浩介は躊躇なくハジメに向かって駆け出した。

（違う、違うんだ。記憶にあるアイツと、今あそこにいる南雲は別物なんだ……！ここはもう、俺の知る世界じゃない）

根拠はない。自分でも何故そう思ったのか、確証もなしにどうして「そう」だと確信

出来たのか説明出来ない。だが、それでも、ハジメの顔を見た瞬間にすんと腑に落ちる感覚がしたのだ。それだけは間違いないと。

——実の所、浩介がそう感じたのは正しい。この世界は浩介の記憶にある世界とは間違いなく別物だった。とはいっても、現時点ではその違いは微々たるもの。せいぜいがとてもよく似てるけれど、厳密には同じではないといった程度。

いわゆる、並行世界というやつである。

“異世界”とは違う、あの世界と同一次元を持つ i f の世界。あつたかもしれない世界。“もしも”という分岐点でわかれた、パラレルワールドなどとも呼ばれるものがあり、可能性の数だけ存在するもの。本来決して交わることのないからこそ並行。

根本を同じくするわかれた枝葉、似て非なる世界。本来なら持ち得ないはずの、別の並行世界の記憶を持つ浩介という異物が現れたことが分岐と関係しているのか否かについては瑣末な問題だろう。原因について浩介本人が知るのもきつとまだまだ先の話。

兎にも角にも、この世界の未来は不確定であり、あの世界と同じ結末になるとは限らない。まだ未来が決定されていない、未知の世界なのである。

浩介は全てを理解したわけではない。現時点での彼に、今いる世界が記憶にあるものと似て非なる別ものであるとか、分岐がどうの世界線が違う云々……といった詳しい所ま

で分かれ、というのは少々無茶が過ぎるというものだ。でも、本能的に違和感を察知し、ハジメがかの魔王と完全に同じ存在ではないという「差異」を悟ったことだけは確かだった。

だからこそ、手を伸ばした。

「——南雲お!!」

俊敏の数値が人一倍高かったおかげだろう、紙一重で走る勢いのままハジメに飛び付き、ベヒモスの突進を避けることができた。ほぼタツクルしたようなもんだけど、ベヒモスの直撃を避けたのでよしとしよう。

よろよろと立ち上がったハジメの姿を一瞥し、どこがとははつきり言えないけどやっぱり違うんだよなあと内心で頷く。

——こいつはあいつじゃない。

目の前のボロボロな少年と記憶の中の魔王様は別人だ。こいつは南雲ハジメ。現在進行形で「無能」な男であり、役立たずと見下されていたにも関わらずその身をとってクラスメイト達を助けてくれた心優しい少年。世界最強の存在になる可能性を秘めた、あいつと根幹を同じくする別存在。

（——記憶に怖気付いて、「不確定な未来」を恐れて、仲間を…恩人を見捨てる？そんな馬鹿な話があつてたまるか！）

そもそもこの記憶が正しいという保証は無い。罨であるあの魔法陣に転移以外の隠し機能が備わってて、そのせいで長い夢を見てたとか、出鱈目な記憶をさも未来の記憶であるかのように植え付けられた可能性だって否定は……いや流石に無理があるよね、うん。それなら自分だけってのは不自然だし、意図が不明だし罨としてのコストも見合ってなさすぎるもんね。

まあ兎に角、幾ら考えても分からないものはしょうがないし、先のことは後で考えればいい。何かあってもきつとどうにかしてみせよう。諦めの悪さにはそこそこ自信がある、精々必死に足掻くさ。だから、今はまず自分に出来ることを、目の前の仲間を助けることだけ考えろ！

だいたい、助けを求める人を見過ごしてのうのうと生きてられる度胸も覚悟も俺にはないってことくらい自分がよく知ってるだろうに何をうだうだしてんだか。我ながら情けない。そうやってあいつより甘い部分があったから、色々と厄介な事件だとか地獄のあれそれとかにも巻き込まれたんだろうに。

あれほど悩んでたのが嘘のように迷いは消え、代わりに芽生えたのは自分への呆れや憤り。頭を壁に打ちつけたい衝動に駆られたけど、んな場合じゃないと無理矢理割り切り、ハジメの手を引いてクラスメイト達のいる階段前に向けて走りだした。

そして、結果的に浩介は失敗した。

途中でハジメが崩壊する橋に足を取られて転んだ挙句に落下しかけたのはまだいい。ちやんと腕を掴んで阻止できたし、その時点ではまだ彼を引き上げて戻るだけの余裕が時間的にも体力的にもギリギリあった。だからこそ無意識に、ほんの少しだけ油断してしまったのだろう。

疲労と僅かな気の緩みによる一瞬の間。それをつかれ、背後の敵に気付かずあつさりサクツと腹を貫かれた。

さすがの浩介も、完全に足場が崩壊した状況で、未熟な肉体と技能スペックに、それまでの戦闘で消耗したうえ手負の状態でまだどうにか出来るだけの余力はもう持ち合わせてはおらず。ハジメとともに奈落の底に落ちるハメになった、というわけである。

「はあくくく…なつつさけな、俺。まんまとしてやられるとかさあ」

回想を終えた浩介はふかあい溜め息をつく。

「格好つけて助けにいつといてこのザマですよ。いやほんと情けないな?!いくらステータスはほぼ初期化されてるわ疲労溜まってるわで視野が狭まってたとしてもよ?暗殺者が背後とられるとか恥ずかし過ぎるだろ…」

もう一度ため息をついたところで、さて、と思考を切り替える。いつまでも過ぎたことを言っても仕方ない、今は現状をなんとかすることだけ考えねば。

「とりあえず怪我の手当しねえと……これ以上放置したら流石にヤバイ……つかよく生きてたな俺」

視界が霞んできたことで、また気を失っては堪らないと危機感を募らせる。ギョツと目を瞑り数秒、よし、と気合を入れて瞼を開き、今度は目眩に襲われないようにと痛みを堪えゆっくり慎重に上体を起こす。なんとか胡座の体勢になると、浩介は骸骨騎士に貫かれた腹の傷を確認する為に上着を脱ぎインナーをめくりあげた。

「うん、急所はなんとか外せたな。重要な血管とかも傷付いてない、はず。……思ったより出血も酷くないな……?」

あの不意打ちの一撃をくらったとき、浩介は背後を取られたことに気付くのが遅れたうえ、落下しそうなハジメを支えていたせいでかなり動きが制限されていた。ゆえに回避行動を取ることは不可能、僅かな身じろぎで当たりどころを少しズラすのが精一杯だった。

そのうえ、直後に水ヘドボンときた。普通なら死んでる。

なにせ水の中では血が凝固しないので、空気中よりも出血が止まりにくい。だから、こうドバドバと勢いよく出血してるんだろ？ 見たくないなとおっかなびつくり覚悟を決めて確認したのだが……浩介の予想はいい方向で裏切られた。

先程まで水に使っていたはずのその傷口からは、確かに血が滲み出している。だが勢

いよく溢れる、というよりはタラタラじわじわ、といった感じだった。

「我ながら生命力強すぎねえ…？これも異世界チートの恩恵かね。すつげえ痛いけど…」

最後にくらった攻撃は、幅が狭い細身の剣だったとはいえ背中から腹まで貫通していた。それで今こうして無事とは言い難いものはまだ生きてるのだから、いつそ感心してしまう。

とはいえ安心するにはまだ早い。現状のじわじわであつても出血し続けていることにかわりはないので、このまま放置してたらそう時間を置かずに浩介は死ぬだろう。

人の身体は、急激な出血の場合は全血液量の3分の1以上の失血で死の危険があり、2分の1以上で心停止してしまう。

「あんまりのんびりしてられないな」

どれだけの時間意識を失つてたのか、正確なところは不明だが体感的にはそう長くはないと思う。というかそうでないと困る。

今すぐ手当てして、少し休めば何とか動けるようになるかと信じたところ。無理そうでも根性で動く。多少の無茶無謀も今はやむなしだ。

…さて、ここで問題となるのが手当の方法である。

残念なことに、浩介の手元には救急箱や簡易治療キットなんて素敵なアイテムは存在

しない。傷口を縫えるような針と糸もないし、あつたとしても出血と地下水に浸かってたせいで指先がうまく動かせる気がしない。包帯や回復薬もないし、救援の見込みもゼロ。場所的に縛ったり圧迫しての止血も難しい。低体温で死ぬのが先か、失血死するのが先か。

わりとヤバげなこの状況で、生存確率を少しでも上げる為に取れる実行可能な手段とはなにか？

幸か不幸か、浩介はすでにひとつ、思い当たる手段があつた。正直あんまり気乗りしないけど、でも死ぬよりマシだからと己を鼓舞する。

「……………よし、焼くか」

——しょうしやくしけつほう焼灼止血法。

出血面を焼くことで、たんぱく質の熱凝固作用により止血するという非常に原始的で苦痛を伴う手法だ。

近代以前、四肢切断などの重傷の場合に有効な止血法として世界各地で用いられ、特別な技術・器具・薬品を用いず安価に行えるため広く行われてきた。ただ、止血する代わりに熱傷を負わせるといふ外傷の取引のような治療法であるため、適切な焼灼とその後の火傷の処置が行われないと逆に悪化させる結果になる。（参考：W i k i O e d

i a さん)

火傷の処置までは難しいが、それでもやらないよりマシ。というわけで、浩介いつきまーす（死んだ目）。

幸いにも、主に使っていた大ぶりのナイフは橋から落下する時に無くしたり水に流されたりもせずにかろうじて無事だったので、これを焼きゴテの代わりにすることした。まず、ざりざりとナイフで硬い石の地面に魔方陣を刻み、詠唱で魔力を通し起動させる。川の水でナイフの刃を軽くすすいだら、発生させた炎で炙る。

「フウー………よし」

服の裾を噛み、えいやっ！とひとおもいに熱したナイフの腹を傷口に押し当てた。途端、ジュウウウ、と肉が焼ける音と嫌な匂いがあたりに立ち込める。

「つ~~~~~!!」

激痛で一気にイヤな汗が吹き出した。悲鳴を噛み殺し、震える手を気合いで押さえつけ、より強くナイフを押しつける。

「ぶろうぶーぐつ、んん”……ハアっ！ハッ、あ、ひっ！……うづつ……くそ、キツツイなおい……」

でも、やらなきゃ死ぬ。これ以外手段はない。大丈夫、耐えられないほどじゃない、と自分に言い聞かせるように心中で呟く。

ナイフでは一度に焼ける範囲は限られる。そのうえ傷は貫通してるから、腹側と背中側2箇所を止血しなければならぬ。

つまり、あと何回か同じ作業を繰り返す必要がある。

「…急が、ないと」

自分とともに奈落へ落下した南雲を探さねばならない。付近に生物の気配がないことから、おそらく彼はここから離れた別の場所に流れ着いたのだろう。川の流れを辿って歩けば、きっと見つけられるはず。

一刻もはやく、探し出してやらねば。今の彼は魔王でもなんでもない、弱いけど心は強くて優しい大事なクラスメイトのひとりなのだから。

戦う力がないことは本人も自覚してるだろうし、どこに魔物が潜んでるか分からない。迷宮の中を無闇矢鱈と動き回ったりはしてはいないと思うけど…。この奈落と上層では魔物の強さが比べ物にならない。隠れていてもそのうち見つかって、逃げる為に川岸から離れてしまうかもしれない。そうなれば広い奈落で彼を見つけ出す難易度がぐっと上がってしまう。

ここで無駄に時間を浪費するわけにはいかないのだ。

仲間を想う気持ちで痛みにはタレそうな己を奮い立たせ、浩介は躊躇なく再び熱しなおしたナイフを傷口へと押し当ててきたのだ。

——この時の浩介には知るよしもなかった。

別の場所で目覚めたハジメが、そうそうに川から離れて迷宮を探索し始めてしまうことを。そして、案の定魔物に見つかってしまい、窮地に陥ってしまうなどということも。まだ、知らない。

## 搜索と再会

幾度か意識を飛ばしかけながらもなんとか処置を終えた浩介は、さっそくハジメの搜索を初めようと立ち上がる。が、さあつと血の気が引く嫌な感覚とともに膝の力がガクンと抜けて、すぐさま再びその場に座り込む羽目になった。

「……っ、……はは、そりゃ血も足りなくなるよなあ……腹に穴空いたんだし……っ」

自嘲の笑みを浮かべ、わざと軽い調子で独り言を呟いてみるも、顔色の悪さなどから体調が絶不調であることは明らか。

立ち上がった瞬間、真つ暗に染まった視界。四肢には力が入らず、脈と呼吸は乱れている。間違いなく、出血による重度の貧血症状だった。

脇腹に剣が貫通したうえ、高所から落下し、冷たい地下水に流された挙句、血止めのために傷口を焼いたのだ。寧ろこうして生きてる方が不思議な状態である。

とはいえ。残念ながら今の浩介に悠長に休んでいるだけの余裕はない。

「はやく、南雲を見つけてらやねえと……」

今のハジメはマトモに戦う術を持っていない。この奈落の底の魔物に見つかればひとたまりもないだろう。

正直浩介も現段階のスペックでは真つ向から対処するのは難しいと言わざるをえないし、そのうえ手負の状態で他人を守る余裕があるのかと問われれば、まあぶっちゃけ厳しい。それでも、諦める理由にはならない。

「大丈夫、きつとなんとかなる」

自分に言い聞かせるように呟き、俯けていた顔を上げた。

息と脈がいくらか落ち着くのを待って、今度はゆっくり慎重に立ち上がる。するとやはり、くらりとした感覚に襲われたが、先程よりはマシだと今度はどうにか堪える。

そうしてはやる気持ちを抑え、気を抜くとすぐ力が抜けそうになる肉体を叱咤しつつ、浩介は慎重な足取りでその場を後にした。

浩介の進む通路は正しく洞窟といった様相だった。

低層の四角い通路とは違い、岩や壁があちこちからせり出しており、通路自体も複雑にうねっている。二十階層の最後の部屋のようなうだ。

ただし、大きさは比較にならない。

通路の幅は優に二十メートル、狭い所でも十メートルはあるのだから相当な大きさである。複雑で障害物だらけ、おまけに覚束ない足取りでは非常に歩き難くはあるが、そ

の分隠れる場所も多い。

浩介は物陰から物陰に隠れ、周囲を伺いながらゆっくり着実に進んでいった。

消耗している今、さつきまで相手をしていたトラウムソルジャーやベヒモスなどの低層に住む魔物とは比べ物にならない力を持つ奈落の底の魔物にかち合えば死は免れない。

だからこそ、気配の取りこぼしがないよう全力で神経を研ぎ澄まし、また大きな物音を立てないようにと爪先にまで細心の注意を払って進む。

どうしても避けられそうになく、魔物と遭遇しそうな場合は物陰で息を潜め、距離を取れるまで必死の隠形でなんとかやり過ごした。

心身ともに負担が大きいその作業は、あつという間に浩介を弱らせていく。

文字通りの疲労困憊、満身創痍。もし友人達が今の彼を見れば即座にベッドに叩き込むか救急車を呼ぶほどの状態だ。

それでも浩介は決して探索を止めようとは思わなかった。

時々息を整えるために立ち止まりこそすれ、落ち着いたと判断すればまた歩みを再開する。少しずつ、慎重に。

そうしてどれほど時間が経つたろうか。

ぞわりと肌が泡立つ感覚。

少し先、カーブした通路の向こうにいるであろう魔物の気配を感じ取った浩介は口の端を引き攣らせる。

明らかに別格の、強力な魔物の気配。この階層でもきつとトップクラスの力を持つであろう気配は、まさしく死の体現。

耳を澄ませてみればグルルと低い唸り声が聞こえてくる。

(……どうする、引き返すべきか?でも、ここまで一本道で他に進めるルートなんてなかったし……)

引き返すか、魔物が移動するのを待つべきか、それとも一か八か全力で気配遮断した状態で横をすり抜けてみるか。

本能はガンガンと警鐘を鳴らしている。だがハジメと地上に戻る術を探すには進むしかない。悩んだ末、浩介はひとまず魔物の姿を確認してから決めることにした。

生来の影の薄さに、今だけは感謝だな、とあえて茶化すように内心で呟きながら、そおつと顔を物陰から覗かせる。

そこには、二メートルはあるだろう巨大な熊に似た魔物がいた。

白い毛皮に覆われた巨軀の体表には、魔物の証である赤黒い線が幾本も走っている。足元まで伸びた太く長い腕には、三十センチはありそうな鋭い爪が三本生えていた。

興奮しているのか、うろうろと同じ場所を行ったり来たりしながら、爪でガリガリと

壁や地面を削っている様子が見てとれる。

(あ、無理なやつだなあれは)

興奮状態にある生物は感覚が通常より鋭敏になる傾向にある。

横をすり抜けるどころか、これ以上近づけば勘付かれる可能性が濃厚だと一目で悟った。

せめて爪熊の興奮が落ち着いてくれれば、自分が手負でなければ、運良く生きてやり過ごせる可能性が無きにしも非ず。だが分の悪すぎる試みにむぎむぎ命を賭けるわけにはいかない。

(大人しくあの場から離れるのを待つしかない、のか)

己の無力さに臍を噛む思いで浩介は足取り重く踵を返すのだった。

~~~~~

「…チツ…まだ、居座つてやがるのかよ…」

思わず舌打ちと悪態を溢す、がそれも仕方ないことだった。

(この奈落で目覚めてからもう半日は…いや、1日? 2日? 時間感覚も麻痺しててよくわかんねえけど、とにかくかなり経ってるよな…)

水場は魔物にかち合う可能性が高かろうと考え、爪熊の居座る地点と目覚めた川の間地点で身を休めつつ定期的に爪熊の様子を伺いに行くことにしたのだが、何度見に行っても状況は変わらず。

唯一幸いなことといえば、他の魔物も爪熊を恐れてか一向に姿を見かけないことだけ。

やむなく再び引き返す浩介だったが、その足取りはひどく重い。精神的な要因も勿論あるが、なにより体調の悪化が著しいことが原因だった。

「あゝ……くっくっそしんどい……」

ずるずると壁にもたれるように座り込む。

重度の貧血は相変わらず。それに加え、傷口を焼いたせいか熱まで出てきてしまったのだ。

血が足りないだけでもキツイというのに、そこに発熱のコンボとくればまさに泣きっ面に蜂、弱り目に祟り目である。

川のおかげで水分補給はできても食べれそうなものがひとつもないこの場所では栄養を取ることでもできず、ただただ体力が削られるばかりなのだから。

頭はガンガンと痛むし、目眩と耳鳴りも相まって気分は最悪。朦朧とする意識をどうにか誤魔化して動いているけれど、正直呼吸するのもしんどい。手足にも力も入らな

い。感覚すらもバカになってきたのか寒いのか暑いのかすら分からなくなっていて、もはや気力だけで動いてるような状態だった。

…あともう一回。ちよつと休んで、次に見に行っても変わらざつたなら、イチがバチか強行突破しよう。

精神的にも体力的にも、浩介は既に限界だった。これ以上は粘つても野垂れ死ぬだけだと己の命運に見切りをつけた彼は、どうせ死ぬなら最後に賭けに出た方がマシだと腹を括る。

そうして様子を伺いに行くこと幾度目。

爪熊の姿はなく、ただただ無機質で静かな通路だけがそこにあつた。

「やった……今のうちに、つと」

爪熊がいた場所は丁度分かれ道になつていた。

この場で狩りを行つていたのである。乾いた血痕らしき痕跡や爪痕がそこかしこに残つている。

いつ気紛れを起こして戻つてくるか分からないので、さつさと通り抜けてしまわねばならない。

巨大な四辻を前に、さてどの方向に進むべきだろうと一瞬立ち止まり、グルリと周囲

を見渡した時だった。

ふと視界に入り込んだあるものに、浩介の意識は釘付けになる。

ふらふらと近付き、覚束ない手付きで拾い上げたソレに息を呑む。

石とも魔物の毛とも違う、馴染みのある手触り。

ソレは、一枚の布切れだった。

元の色がわからぬほど血で汚れボロボロに千切れた、服の切れ端。

「……………な、ぐも…？」

奈落こんな場所の底に人間など普通来やしない。それこそ、自分と南雲のように橋から落下した

とかでもない限り。

この布は自分のものじゃない。なら南雲のものだと考えるのが自然。

問題はこういった経緯で、何故ここに服の切れ端だけが残されたのかということ。

だつてこの場所には、さつきまで爪熊がいたのだ。

ヒト一人なんて簡単に食い殺せてしまえる、強くて巨大な……

「つー違う、そんなわけない！そんなわけ、ない、よな…？」

脳裏をよぎる最悪の予想を即座に否定する。

だが、その程度で不安は拭えなかった。

——こんな場所で南雲が死ぬわけない。

……本当に？

「前」の彼は無事に生きて帰ってきた、でも「今」の南雲は彼と違う、彼と全く同じ道を辿るとは限らない。

それに浩介は奈落での詳細を知らない。どんなふうに通ごし、「最愛」とどうやって出会って、如何なる手段で生還したのか。

雑談か何かの折に、概要くらいは聞いた気もするけれど、残念ながら全く思い出せない。単純に忘れているのか、はたまた貧血と発熱でろくに頭が回らないせいだろうか。

分からない。怖い。もしかしたら、という疑念が消えない。
南雲は無事なのか。まだ生きているのか。

もはや爪熊が戻ってくる可能性などどうでもよかった。何か少しでも手がかりは無いかと目を凝らしあたりを観察する。

そうして気になったのが一際大きな血溜まりの跡と、そばの岩壁に刻まれた夥しい破壊痕。

比較的新しく、何度も引つ掻いたように幾筋もの線が見て取れることから爪熊がやったもので間違い無さそうだ。

近づいてみれば足元に小さな横穴のようなものがあるのも分かった。

横穴の天井は膝より少し上あたりにくるので縦幅は約50センチ、横幅は目測で1

メートルちよいといったところ。

爪熊の巨軀では到底入れないが、小型の魔物や人であれば這って進むことが可能なサ
イズだ。

もしかしたら、という胸中に芽生えた微かな希望に突き動かされるように、浩介はお
そるおそる横穴に手を差し入れ、壁面を指先でなぞる。

ゴツゴツと不規則な凹凸のある洞窟の岩壁とは違う。妙に整った滑らかな感触は、魔
法や人の手がにより整えられた加工物を思わせる。

…南雲ハジメの天職は、土や石など鉱物を加工することに長けた「錬成師」。

彼の持つ魔法は、通常は剣や槍、防具を加工するためだけの魔法。けれど、迷宮の壁
や地面を「錬成」することで戦闘に活用し、クラスメイトを助けることを可能とした力
でもある。

その力をもってすれば、襲ってくる魔物の手を逃れ、壁の中に逃げ込むことも可能だっ
たのではないだろうか。

獲物に逃げられたからこそ、爪熊は興奮を露わに、そして執念深く、再び逃した獲物
を捕らえんとこの場所で待ち構えていたのではないか。

「…確かめてみるしかねえよな」

穴の中に魔物が潜んでいれば一巻の終わりだけれど、賭ける価値はある。

腹の傷に障らないようにしつつ腹這いになり、横穴の中に身を滑り込ませる。暗くてよく見えないので、手で周囲を確かめながら匍匐前進の要領で慎重に奥へ進んでいった。

どれぐらい進んだらうか。

先の方に仄かな光が見える。出口だらうか。

暫しその場で観察するが特に異常は感じられなかったので、一応警戒は解かずに浩介は再び前に進む。

辿り着いたのは、青白く発光する鉱石の光に満ちた、小さな小部屋のような空間だった。

「っ、南雲!!」

蹲る人影、ようやく見つけた探し人の姿に思わず声を荒げる。

ぐったりとした様子に一瞬ヒヤリとしたが、声に反応してか呻き声をあげ身じろぐ様にそっと胸を撫で下ろした。

ああよかった、やつぱり生きてた。

「う……あれ、遠藤くん……?」

「南雲! 良かった。やつと見つけた……!」

「え……もしかして、ずっと探してくれてたの?」

「当たり前だろ。とにかく、本当に良かった。」

「どっか怪我とか、は…」

安堵と喜びから思わず涙を滲ませる浩介だったが、ほんの少し視線をずらした先、鉾石の発する青白い光の中ではつきりと目に映ったものに再び息を詰まらせ表情をこわばらせる。

左腕が、ない。

肩の少し先から綺麗さっぱり無くなってしまっている。

「それ…」

「あ、ええと、魔物に襲われちゃって…遠藤くんは大丈夫だった？」

気まずそうに、それでも浩介を気遣ってぎこちない笑みを浮かべるハジメの姿に、どうしようも無くやるせない気持ちに襲われる。

脳裏をよぎるのは、爪熊が陣取っていた四辻の光景。血溜まりと夥しい爪痕は、あそこで襲われ、命からがらここに逃げ込んだ痕跡だったのだ。

「俺は、見つからないように移動できたから…」

「そっか、よかった」

その安堵の言葉に、どうしてと、何故彼がこんな目に遭わなきゃいけないのだろうか、そう考えずにはいられなかった。

南雲はクラスメイトを助けたのに。凄いやつなのに。なのにこんな場所で酷い怪我を負って、ひとりきりで。それでも他人を心配できる優しいやつなのに。なのに俺は何も出来なくて。もつとはやく見つけられてたら、もしかしたら。どうして俺は。

とりとめのない言葉がぐるぐると頭の中を駆け巡る。無性に自分が不甲斐なくて、情けなくてしようがなかった。

「ごめん。ごめんなあ、南雲…本当にごめん」

浩介はやるせ無い気持ちを抑えきれず、つい謝罪の言葉を口にする。すると唐突なことにハジメはぎよつと驚き、戸惑いに溢れた声で「なんで遠藤くんが謝るの？」と問うた。

「こんなことに巻き込んで、謝らなきゃいけないのは僕の方なのに」

「バカいえ、南雲こそ悪くねえだろ。お前はみんなを助けたじゃねえか」

「でも…」

「いいから、謝るんじゃねえ。誰がなんと言おうと絶対にお前が悪いはずねえんだ」

「…：うん、分かった。それなら遠藤くんももう謝らないでね。君だって何も悪いことしてないんだから。寧ろ僕を助けようとしてくれて、その上こうして探しに来てくれて…：本当に、嬉しかったんだよ。ありがとう」

「…：俺の方こそ、ありがとう」

でも助けられなかったからお前はこんな目に遭ってるんだろ、とは言えなかった。それを口にしたらきつと優しい彼は否定して怒ってくれるんだろうなと分かっていたから。

だから代わりに礼を告げれば、ハジメは何かお礼言われるようなことしたつげと首を傾げる。

その姿になんだか気が抜けて、急に身体が重くなった。

「あ、れ」

「遠藤くん? どうしたの? …遠藤くん!」

ぐらりと頭が揺れて、目の前が暗くなる。

焦ったようにかけられるハジメの声も遠のき何も聞こえなくなつて、大丈夫だという告げようとする気持ちとは裏腹に口から出るのは荒い呼吸だけ。

そういやこの身体割と限界だったけなあ、なんて他人事のように思ったのを最後に、浩介はどうとう意識を手放したのだった。